



長尾クリニック (兵庫県尼崎市) 院長
長尾和宏

nasnusガイド 特別コラムVol.4

医療の主役は看護師さん

— 東日本大震災被災地にて —

被災地で奮闘する看護師

阪神大震災の思い出
十六年前の阪神大震災の時、私は市立芦屋病院の勤務医でした。数日間は不眠不休で働きましたが、その光景はまさに「夢の中」でした。なかでも、自宅が全壊しながら出勤した看護師さん、骨折した足を引きずりながらも働き続けた看護師さんの姿を今でも鮮明に覚えています。みんな廊下などに寝ていました。今ではまさに「戦友」です。そして当時の思い出を綴った本「震災が与えてくれた町医者力」を出版した矢先に、今回の東日本大震災が起きました。

知合いの看護師さんは、震災翌日からさっそうく被災地に入りました。新潟を經由して見知らぬ山道を迷いながら、宮城県に辿り着いたそうです。あの状況の中、凄い行動力だと感服しました。彼女は中国の四川大地震の時にも、何度も支援活動に行かれました。彼女こそ「走る災害看護」そのものです。遅ればせながら私自身もゴールデンウィークの8日間を利用し、被災3県を巡る活動をしました。様々な事がありましたが、その一部が記録映画や書籍という形で公開される予定です。気仙沼市ボランティアセンターで出会った看護師さんは、避難所での支援や在宅患者さんの訪問看護をしています。受け持ちの避難所を護るべく、体育館に寝泊まりしている看護師さんもありました。また、ミャンマーやオーストラリアなどから駆けつけた日本人の海外看護師さん達とも出会いました。彼女たちはお寺に雑魚寝しながら、医療活動を続けていました。お風呂にも入らず頑張っておられました。凄くパワフルでした。

気仙沼湾にボツカリ浮かぶ、大島という島があります。結構大きな島です。なんと津波が島の中央部を超えてしまったそうです。4月30日、前日に広島から寄贈され再開したばかりというフェリーに乗り込み、医療チームと共に大島に渡りました。関東や東北の大病院から派遣された医師、看護師、薬剤師、理学療法師らがチームで活動されていました。島にたった一人しかいない訪問看護師さんにも同行し点在する在宅患者さんを一緒に訪問しました。認知症や脳梗塞後遺症の在宅療養風景は、私が毎日地元の尼崎で見るとの全く同じ。介護ベッドも介護者の疲れ具合も、自分の日常そのものでした。その訪問看護師さんの悩みは、島に1人しかいないのでなかなか島を離れられないこと、でした。

医療の主役は看護師さん

必要な医療が受けられる国へ
今後、放射能で大変な福島県の医療も心配です。避難を拒否して町に残る住民や在宅患者さんは一体どうなるのでしょうか。できるものなら彼らの想いに寄り添える医療でありたい。福島は本当に美しい所。だから多少のリスクがあっても、許された場所に住む限り、必要な医療が受けられる国であって欲しい。今回の被災地は、もともと医療機関が少ない地域です。震災後、医療過疎に拍車がかかっています。今は、巡回診療車による診療や、訪問看護師さんによる在宅ケアの充実が望まれます。いつか、北海道のように関東や関西から飛行機で「通勤」する医療者が増えるのかもしれない。

東北の高齢化率は、私が住む関西地域の約2倍だそうです。被災地の医療・介護は、超高齢化社会・日本の近未来を象徴しています。新たな介護施設の建設ができない現在、在宅療養患者さんはさらに増加するでしょう。被災3県の地域医療の主役は、看護師さんになることは間違いありません。被災地大島で孤軍奮闘する訪問看護師さんを出しながら、私は日々尼崎で在宅医療に走り回っています。災害が起るたびに、看護師さんの活躍が報じられますが、報道されるのはごく一部。普段から活躍している看護師さんが沢山おられます。「患者さんに寄り添えるのが看護師冥利」と言う声も聞こえてきます。そんな看護師さんたちを、医者の方は頼もしく思う限りです。



△長尾和宏プロフィール▽
1984年に東京医科大学卒業後、大阪大学第二内科に入局。平成7年、市立芦屋病院で阪神淡路大震災を経験。震災直後に兵庫県尼崎市にて長尾クリニックを開業。現在は複数医師体制で、予防医療から在宅医療まで年中無休で診療。個人ブログはドクターズ・ブログ「医師・医者人気ランキング」で1位独走中。朝日新聞電子版・アビタルブログにも、「バンドラの箱を開けよう」（エビック）など著書多数。